「まじかぁ……」
ため息をつき、宙を仰ぐ。
ここ最近、やばいとは思っていた。だけどいざ数字で現実を突きつけられると結構ダメージがある。
目の前の鏡を見れば、パンツのゴムに乗ったお肉。太ももも心なしか太くなった気がする。これはちょっとまずいかもしれない。
この前、彼氏に言われた言葉を思い出す。彼が部屋に遊びにきた時、……まあ流れで致したわけだが、その時に言われたのだ。
――夏海ちゃん、柔らかくって抱き心地がいいよね。
その時は気にせず、うれしいなんて言って流したが、今になって思うとあれは遠回しに太ったと言われたようなものだ。

……うーん、ダイエットしようかな？　でもダイエットってなかなか成功しないんだよなぁ。　運動？　食事制限？　それともプロテインを飲めば良いのかな？……なんかどれも大変そう。
「はぁ～」
「どうしたの？　ため息ついて」
「へっ！？　あっ、いや！」
慌てて顔を上げれば、鏡越しに恋人と目が合う。　彼は不思議そうな顔をして首をかしげていた。
「えっと、なんでもないよ！　うん、なんでも！」
私は愛想笑いを浮かべてごまかすように言った。　しかし彼は納得していないのか、じぃっとこちらを見つめてくる。……そんなに見つめられたら困るんですけど。

「ねぇ、俺には言えないこと？」
背後から抱きしめられながら耳元で囁かれる声。彼の吐息がくすぐったくて、思わず身を捩ってしまう。
後ろを振り向けば、優しい眼差しで見つめられてしまい何も言えなくなってしまった。
そしてそのまま、ゆっくりと唇を重ねられる。触れるだけのキスなのにすごくドキドキするし幸せだと思った。
「……あのね」
少しの間沈黙が続いた後、覚悟を決めて口を開く。
「実は最近、体重が増えちゃって……」
「ああ、それで悩んでいたんだね」
私が言い終わる前に理解してくれたようだ。さすが私の彼氏さ

んですね。
「じゃあさ、一緒に頑張らない？俺はいくらでも付き合うよ」
ふわりと微笑む彼に、胸がきゅんとなる。なんだかすごく嬉しくなって、ぎゅーっと強く抱きしめた。
「ありがとう、祐樹くん大好きだよ！」
私の言葉を聞いて照れたのか、彼は頬を赤らめて視線を逸らす。可愛いなと思いながら彼の肩口に頭を預けると、そっと髪を撫でてくれた。
「じゃあ、今から頑張ろっか♡」
「えっ？」
驚いている間に抱えられ、ベッドへ押し倒される。気づけば両手は頭の上で固定され、足の間に体を割り込ませてきた。そし

て、熱っぽい視線を向けて首筋に吸い付いてくる。
「ちょっ、お風呂入ったばっか……ひゃっ♡」
ちゅっ、と音を立てて離れていく唇。チクッとした痛みを感じて下を見ると、そこには赤い痕が残されていた。彼は満足そうに笑みを深めると再び唇を重ねる。何度も角度を変え、貪るように舌を絡め合わせていった。
次第に息が上がっていき頭がボーっとしてくる。それでもキスは止まることなく続けられた。ようやく解放された時にはもうヘトヘトだった。体中が火照り、心臓が激しく脈打っている。きっと顔は真っ赤になっているだろう。彼は優しく微笑んで、額に張り付いた前髪を払ってくれた。そして耳元で甘く囁いてくる。

「いっぱい運動しようね♡」
その言葉にゾクリとする。だけど嫌じゃない自分がいた。彼の大きな手が肌の上を滑り、服の中へと入ってくる。脇腹をするりと撫でられて体がビクンと跳ねてしまった。クスリと笑う気配を感じて睨みつければ、ごめんごめんと謝られる。しかし手の動きは止まることなく、むしろ激しさを増していき、ついにはブラジャーの上から揉まれ始めた。最初はゆっくりと感触を楽しむようにしていたのだが、徐々に強弱をつけて刺激を与え始める。やがて頂きを見つけると指先で弄び始め、甘い疼きを生み出していった。
「あっ♡そこだめぇ……んぅ……♡」
布越しに摘ままれ引っ掻かれ、カリカリとされる度に快感が生

まれていく。無意識のうちに腰が揺れ動き、もっとして欲しいとおねだりするかのように胸を突き出してしまっていた。すると彼は悪戯っぽく笑って乳輪ごとつまみ上げる。そしてそのまま先端を爪で弾かれた。

「きゃうっ！やぁ……ちくびきもちいぃぃ……♡」

ビリリッとした電流のような快楽が走り抜けていく。思わず背を仰け反らせてしまい、その姿を見た彼が楽しげに目を細めた。そして今度は直接触れようと服の中に手を入れられる。直に触れられた瞬間、私は熱い吐息を漏らした。

乳房全体を包み込むようにして触れられる。ぐにぐにと形が変わるほど激しく揉まれるたび、私の口から喘ぎ声が漏れ出した。時折ピンッと勃ち上がった突起を親指で潰されると、あまりの

強い快感に涙を浮かべてしまう。そんな私を見て彼は愛おしそうに目を細めていた。そしてそのまま片方を口に含みだす。生暖かい舌で舐められ転がされ甘噛みされて、もう片方も手で執拗に責め立てられ続けた。

「あぁっ……！りょうほういっしょ……やぁ……♡」

両方同時に可愛がられ、私はただ身悶えることしかできない。だんだん頭の中が白く染まっていく感覚に襲われ、何も考えられなくなっていく。

「かわいいよ……夏海ちゃん」

「んっ……♡」

耳元で囁かれる声すら気持ち良く感じてしまい、身体を震わせながら小さく声を上げた。

胸への愛撫だけでこんなにも乱れてしまっている自分に驚く。いつの間にかショーツは脱がされていて、彼の指先が秘部をなぞっていた。そこはもう十分すぎる程濡れていて、少し触れるだけでも水音が響き渡る。彼はそれを面白がりながらも、決して奥まで入れようとしてこない。入り口付近を軽く擦るだけなのだ。それが焦ったくて仕方ない。早く欲しいと思っているのに……。

「ゆーきく……おねがい……」

はやくちょうだい、という気持ちを込めて見つめると、彼は意地悪な笑みを浮かべた。そしてゆっくりと指を沈めてくる。待ち望んでいた質量を与えられ、膣内が悦んでいるかのように収縮を繰り返しているのを感じた。そして彼の指先は、ある一点

を見つけ出す。
「ひゃうんっ！？」
いきなり与えられた強い刺激に悲鳴を上げる。しかしそれは一瞬の出来事で、すぐにまた同じ場所を弄られ続ける。そのたびにどんどん体は昂ぶっていって、気が付けば自ら腰を動かして更なる快楽を求めていた。
「夏海ちゃん、自分で動かしてるよ？」
「だって……あんっ♡」
彼の指摘通り、無意識のうちにはしたない行動を取っていたようだ。恥ずかしくて顔が熱くなる。
「あはは、そんなに良かったんだ」
彼は愉しそうに笑いながらも、的確に弱点を攻めてくる。ぐりっ